



六代文吉と真砂夫人時代の伊藤家 「絵葉書展」の資料から見えてくる実相

財団法人北方文化博物館統括室長・学芸員 佐藤隆男



新潟県の大平野をよぎる二本の大河がある。信州信濃川から流れ込んでいる日本一の長さを誇る信濃川、會津盆地から流れてくる阿賀野川。この阿賀野川西岸に「沢海」と呼ばれる三百戸余りの集落がある。この地に江戸時代中期から根を下ろし、明治、大正、昭和にかけて代を重ねて、やがて豪商から豪農への道を歩み大地主となった一族、伊藤家の本邸がある。この地方一帯は、阿賀野川はじめ大小河川の氾濫原であったが、伊藤家はこれら土地の形勢が不利な地域の大規模な開拓を行い悪田を美田に変え次第に広大な新田を集積していった。地主としての発生は明治に入ってからであるが、やがて所在一市四郡六十四ヶ町村に誇り、所有田畑1,372ha、山林1,000ha、差配人78名、蔵所58ヶ所、小作人2,800余名を数え、作徳米三万俵、昭和期には県下一の地主となった。

1882（明治15）年から8年がかりで建てられたこの本邸は敷地8,800坪（30,000㎡）、建坪1,200坪（4,000㎡）、部屋数65を数える純日本式の豪壮さを備えた邸宅である。長年の風雪に耐え、往時の姿そのままに豪農伊藤家の暮らしを今に伝えている。

当時の田畑は農地解放によって伊藤家の所有から離れたが、かつての栄華を語るその遺構は北方文化博物館として財団によって管理されている。2000（平成12）年4月、国の登録有形文化財に登録された。



六代 文吉

2009年、端から端まで100mはあると思われる奥土蔵の2階戸棚から十数冊の古いアルバム帳が出てきた。重厚で明治の香りを発散し、暗がりの中で輝いていた。当時から理事の許可がなければ入れない宝蔵といわれてきたその蔵で、美術品の陰に隠れていた本家の宝物を見つけた。

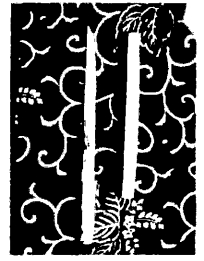
発見された数々の絵葉書は1800点にのぼるが、探せばまだ出てくると含蓄するところ大である。ジャンルは多岐にわたり、造りな運筆で認められた絵葉書群の美しさに蔵の中で釘付けにされ、しばし明治、大正、昭和の移り変



真砂

わるその時代に生きた伊藤家のひとびとの中に溶け込みタイムスリップしたようであった。

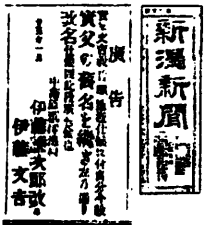
六代文吉夫人真砂が未亡人となった、1903（明治36）年は、絵葉書文化の黎明を告げ絵葉書メディアが世俗に浸透していく時代であった。それまでの書簡は、和紙の封筒手紙のやり取りによるものが多く残されている。例えばここに、2011年初めて存在が明らかにされた真砂直筆の書簡がある。義妹イツの嫁ぎ先、分田村（現阿賀野市）大岡家に送った巻紙の礼状である。達筆に書かれた文面は後述する六代文吉との新婚旅行の際、道中の安全を願い守り刀を大岡氏から預かり、そのおかげで京都、広島、東京への七十日間に亘る旅は、「鼻紙一枚たりとも使用せず、無事帰郷できた」旨の手紙がある。守り刀のおかげで風邪も引かず、無病息災で帰郷できたという内容の礼状である。送先は、大岡治平宛、差出人は伊藤文吉となっているが、真砂が書いたものである。また、その太刀は、大岡家の家宝として代々引き継がれている。



大岡治平宛巻紙（守り刀）



大岡治平様宛の礼文



新潟新聞六代義名広告

女性はカタカナの名前が多かった明治の時代に、漢字名を授かった名門村山家から興入れした真砂は、旧家の為乗りである「足入れ（婚姻の成立祝いをすませずに嫁が婚家に入ること・広辞苑）」を経験する。入嫁は1892（明治25）年5月23日、晴れて入籍となったのは、その年の9月3日、3ヶ月余の足入れ期間があった。伊藤家に入嫁したものの、その期間中の手紙の差出人名は伊藤真砂ではなく村山真砂となっている。

伊藤家では1882（明治15）年から着工していた大邸宅の築造が竣工した。その翌年の1890（明治23）年春、五代文吉は、六代となる謙次郎の嫁探しを開始していたのだ。伊藤家にふさわしい家柄の娘を探索した内密の書面によると、なんと新潟県下全域にわたる名家、財閥から五十六家の住所氏名と注釈付の一覧表が作成されていた。

築造したばかりの大邸宅が直ぐ様終焉の地となることを誰が予想したであろう。五代文吉は、年も押し迫る1891（明治24）年の暮、跡継ぎの嫁の決定をみずに、四十八歳にしてこの世を去った。残された妻キイ四十三歳、倅謙次郎は二十一歳。葬儀後の1892（明治25）年1月8

日に家督相続し、翌9日は、謙次郎改め、六代文吉への改名許可届出書を提出している。また、1月22日付の新潟新聞（新潟日報の前身）には改名広告も出している。

明治25年の晩春、未亡人となったキイの主導で、この嫁探し五十六家一覧表にはなかった高柳村岡野町（現柏崎市）の庄屋、十代村山吉次の次女真砂（十六歳）が選り定められたのである。伊藤家からすれば家柄が格段に高い村山家とつながりを持つことで、財力に見合う家柄の向上を図ったのである。

村山家は信州の出で、東頸城郡松之山を経て寛永年間に高柳の地に移住し、それからは歴代に亘り岡野町の大庄屋を努めた名門。代々文人墨客が多く、八代正茂の弟は北越雪譜で知られる鈴木牧之の娘婿であり、九代鉄斎は山水画を能くし、分家の村山致道は画家である。累代続く文人家系で生まれ深窓に育った真砂は、長岡での嫁入り修行により博学多識な才女に転じていったのである。

五代文吉の次女ラクは、新潟の豪商、四代斎藤喜十郎へ嫁いだが、子室に恵まれず弟の庫四郎が次代を継ぎ、七女八代重が嫁している。真砂と絵葉書のやり取りが多い末っ子八代重とは、年齢差もあり、文面からすると真砂はとりわけ可愛がっていたようである。また、八代重は後にでてる六代文吉の書斎兼茶室「三角間（後の三楽亭）」を一時期寓居としていた。ここは、八代重が生まれた部屋「新奥」から廊下で直結し、かつての謙次郎の勉強部屋でもあった。この新奥と呼ばれる部屋で、謙次郎は悶々と三角間の図面を作成した。この三角間は、11坪余の書斎兼茶室で、水屋もあり柱、建具、畳のほとんどが三角形や菱形で、正規の畳1枚だけが中心に据えられた世にも稀なる小事である。昭和に入りこの三角間を七代文吉が三楽亭と命名した。

謙次郎はこの部屋を「元浩房」と名付け、自らを「元浩房主」または、「元浩園」、「南洋子」と称した。この「元」を紋様化し、定紋にかえて用いる裏家紋とした。やがて、この「元」を丸で囲んだ家紋印入りの印半纏を着た男衆が、1892（明治25）年5月に六代文吉と

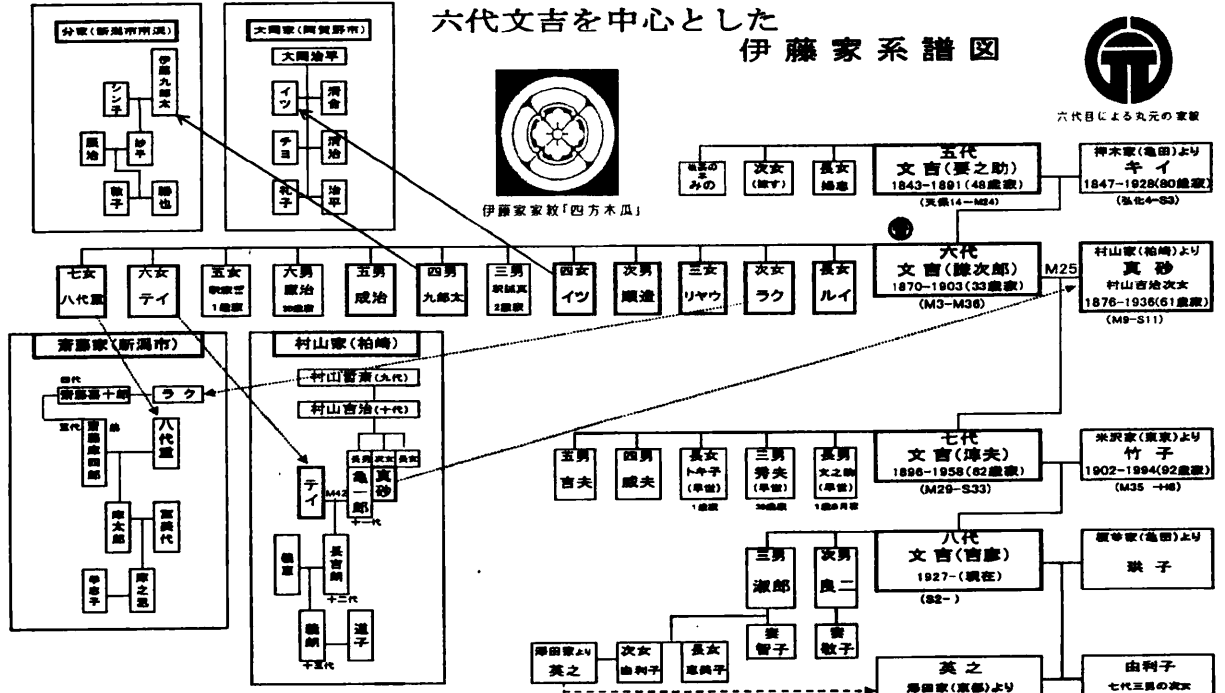


なって間もない謙次郎の婚儀で、花嫁真砂を迎える儀式の警護や當構方の祝儀服となっていたのである。元は元首の元、伊藤家の長となった重庄を自ら縮め、自覚しこの元という文字に拘泥していった。常時着用していた鍵札、ふみ箱、酒桶、酒瓶の箱などには丸元の焼印が押されている。また、六代愛用の印箱が二箱残されている。この中には、三楽山主、元浩房等々と刻まれた竹、石、鉄、象牙等の数十種類の印判が収納されている。

さて、新郎文吉22歳、新婦真砂16歳の婚儀は三日間続き、披露宴の第一日目は、両家親族50人、二日目は、番頭、米の仲買人、土地の支配人等約100人、三日目は、村の主立ち、集落の小作人、使用人等、100人で三日三晩盛大な祝宴が続けられた。

1894（明治27）年3月29日、長男文之助が生まれ、落ち着いたころ翌年の3月に世係伯の男女二人をお供に、人力車四台で新婚旅行に旅立つ。京都を拠点に奈良、伊勢と参拝や見物にまわり広島へも足を延ばしている。帰路は東海道経由で東京に出て会津廻りで5月に帰り着いた旅は七十日間にも及んだ。この年の10月、不運にも文之助は1歳8ヶ月で夭折する。六代の「元浩房揚石辨録」という記録覚書帳には、十月廿八日午前零時十分病死と書

六代文吉を中心とした伊藤家系譜図



いてある。夫妻の悲しみがはかりしれなかつたことは想像に難くない。待ち望んだ第一子が生まれることの喜び、そして世継となる長男の成長の記憶をこの冊子に書き留めていたが、200頁のうちわずか33頁の記録のみで文之助の火葬、葬儀が終わった後からは、この冊子は残りの167頁すべて空白の未使用のまままで終わっていた。常用していた机上の「矢立」の中の筆はさぞかし重かつたのであろう。この空白となった和紙の厚みが虫食いの穴とともに六代の悲しみの深さを物語っている。

夫の死後、真砂は絵葉書文化の幕開けと共に、実家の兄、義弟、妹等、親戚との絆を封書から絵葉書に転じ縁者との深い絆をさらに強めていく。

礼状、見舞状、年賀状等のやり取りによる実通便の絵葉書は、交互に伝え送る「通」と、便りという「借」からなる「通信」という役目から、記念記録、収集保存すべきコレクションとしての要素を含みながら隆盛を極めていくのである。晩年の真砂は、絵葉書帖を見ることも一つの楽しみとしていた。出しやぼることなく寡黙さと品を備えた真砂は、ここ沢海の集落の人たちからも敬愛されていた。

1896（明治29）年12月11日、次男淳夫が生まれる。淳夫は、後の七代文吉となり、慶応大学からペンシルバニア大学ウォートンスクールを卒業後、コーネル大学にも籍を置き勉学に励んだ。8年ほど米国に滞在した所帯道具をいくつもの大型トランクに詰め込み、1925（大正14）年、AWATAMARUという客船にて帰国した。道具の中でひときわ大きかったのが、撞球といわれるビリヤード台であった。今も静かに二階の展示室に置かれている。帰国したこの年、淳夫は、京橋、米沢家の娘竹子と結婚。竹子は東京生まれのハイカラな人、自然体で行動すれば、旧家の風習にそぐわない場合もある。そのようなとき、夫七代（淳夫）は、誰の粗相か咎めるが、母真砂は、それは、私が指示したことだと嫁竹子を庇い、また真砂の指示で良い結果のことは、嫁がやったことだと竹子を擁護していた。いつも、嫁を庇う真砂の思いやりの心は、村山家の余胤と教育からくるものであった。

1927（昭和2）年には八代文吉となる吉彦も誕生し、安泰な日々が続くかのように思えた。県下の大地主としての時代が続いたが1931（昭和6）年、満州事変勃発、続いて太平洋戦争へと移り、1945（昭和20）年終戦。この1ヵ月後七代文吉は、この館を博物館にする決意を固めたのである。

終戦直後、伊藤家の調査に来た進駐軍ライト中尉と七代文吉が会話を交わすうちに偶然にもペンシルバニア大学の同窓生ということが分かった。伊藤家の遺構保存のための法人化への道のりは幾多の困難があったが、この出会いにより財団法人設立に向けて拍車がかかった。その年の10月10日に申請した財団法人設立申請書は却下され、再提出命令を受けていた。



冊子と矢立（右）



ライト中尉

その後はライト中尉の絶大な支援もあり第二回目の財団法人設立認可申請書は、1946（昭和21）年2月12日に無事許可となった。その影にはもう一人の立役者、伊藤家新潟の別邸（現新潟分館）に寄居することとなる文人會津八一の存在があった。英語教師の経験を持つ八一はライト中尉と接触の機会もあり、ライト中尉に伊藤家の財団法人化への助言もしていた。かくして、わずか終戦から半年後に、財団法人史蹟文化振興会（後の北方文化博物館）が漸く誕生したのである。

出典

伊藤家古文書 設立認可申請書額附設立登記関係書類

（自昭和20年10月至昭和30年3月）

伊藤家古文書 元宿房堀右神書（六代文吉記録覚書帳）1894（明治27）年
新潟県大地主名簿 新潟県農地部農地管理課 1968（昭和43）年3月30日発行
三角亭物語 北方文化博物館 1985（昭和60）年8月3日発行 角田夏雄著



七代夫妻とライト夫妻
左から2人目が七代、5人目が竹子 於：清水園



ライト夫妻（中央）、2列目ライト夫人左隣2人目が会津八一
1948（昭和24）年7月28日 於：北方文化博物館・新潟分館
「国立新潟大学開学の尽力者ライト中尉送別会（新潟大学主催）」